[サンチャ]

SANCHA

Mar.2021 vol.04

日本大学 三軒茶屋キャンパス 広報誌

危機管理学部

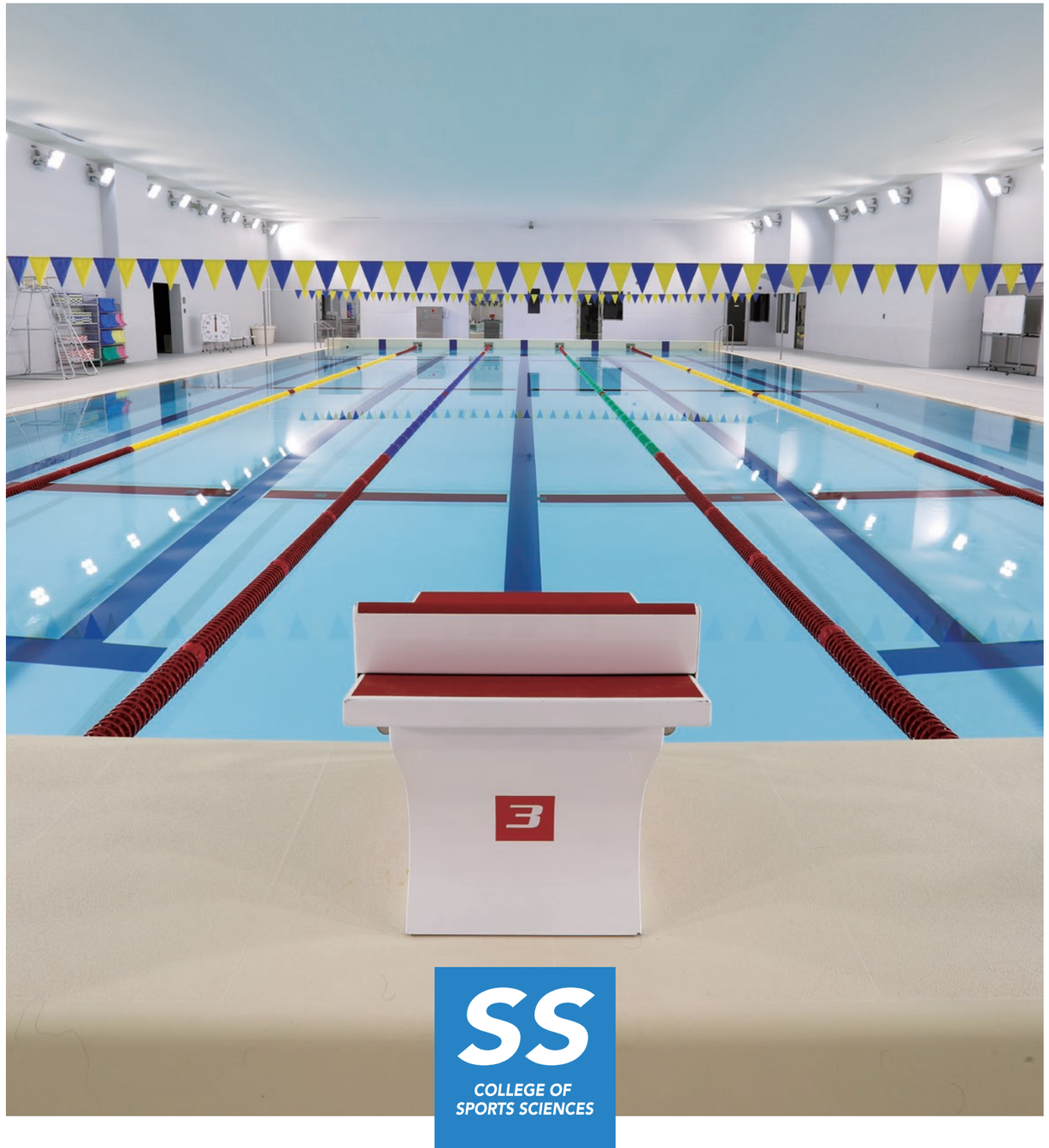
[サンチャ]

SANCHA

Mar.2021 vol.04

日本大学 三軒茶屋キャンパス 広報誌

スポーツ科学部



SSトップアスリート対談

「挑戦」という進化のために。

スノーボードハーフパイプ／スケートボード　競泳

平野 歩夢 × 池江 璃花子

コーディネーター：スポーツ科学部 専任講師／陸上・棒高跳日本記録保持者　澤野 大地

同じスポーツ科学部に所属しながら、これまで会うことも話をする機会もなかったトップアスリート2人によるスペシャル対談が実現。
オリンピアンの先輩であり、また授業を通じて2人をよく知る澤野大地先生が聞き手となり、「初めまして…」から始まったオンライン対談は、
五輪や競技への思い、苦難に立ち向かってきた経験、これからのことなど多岐にわたり、お互いに大いに刺激を受けるものとなった。

澤野：お二人は初対面ということですが、お互いにどんな印象を持っていましたか？

平野：先日、池江さんの特集番組を見ましたが、すごく強いメンタルを持って頑張っている方だなって思いましたし、とても刺激になりました。

池江：私もトップアスリートとして、すごく尊敬できる方だと思っていましたし、学内の先生方から平野選手は「話の内容や考え方がとてもしっかりしている」と聞いていたので、今日お話できるのが楽しみでした。

五輪が教えてくれたこと

澤野：平野選手は冬季五輪2大会連続の銀メダルですが、それぞれどんな感想でしたか？

平野：ソチのときはまだ中学生でしたが、あまり実感がないまま、やってきたことが本番で上手くいって、自然とメダルが獲れちゃったという感じで、夢みたいな気持ちでした。そこからいろんなことを意識するようになり、「もっと強く」というテーマで4年間、金メダルを目指して走り続けたんですけど…そこまで準備しても、確実な結果というのはついてきませんでした。気持ち的には4年前と4年後では全く別物で、ソチ後のほうがいろんな試練を感じて、競技自体を楽しめないというか、苦しさのほうが勝っていました。

澤野：なるほど。一方、池江選手は2016年のリオ五輪で日本競泳界史上初の7種目に出場し、100mバタフライでは日本新記録で5位入賞でしたが、その時どう感じていましたか？

池江：私もまだ高校1年生で、決勝に残ることが目標だったので、準決勝が一番緊張しました。予選・準決勝・決勝と、日本記録を更新してきたので「すごくいいレースができたな」と思う反面、決勝で3位とのタイム差が0.3秒だったので、メダルに届いたかもしれないという悔しさもありました。それと、帰国したら空港でメダルを獲った選手と獲らなかった選手に分けられて…。そのときに「五輪は出るだけじゃダメなんだ」って思い、試合に対する気持ちや、モチベーションというのが自分の中で変わったんです。それまでは、小さい大会なら「これくらいでいいかな」という感覚でしたが、どんな試合でも結果を出し続けていけば、その積み重ねで大きな大会でも結果を残せるんじゃないかって、思考が一気に変化したので、すごくいい経験になりました。

澤野：では、五輪とはどういうものですか。

平野：僕は、小さい頃から見ていた夢の場所の1つだと思っています。テレビでスノーボードをやっているのを見て、当時のスーパーヒーローみたいな選手たちに憧れていましたし、今でもその夢は全く消えていないので、そこを目指してやっています。

池江：私は、五輪も普通の世界大会も変わらないかなって思っています。気持ちの入り方は若干違うのかもしれませんが、大会の名前の違いだけなのかなって。そう捉えようとしているだけなのかもしれませんが…。

苦難を乗り越える力

澤野：平野選手は2017年3月に大けが、池江選手は2019年2月に白血病を発症し、共に長期の闘病生活やリハビリを経験し、そこからお二人とも見事に復帰を果たしましたが、どのように乗り越えてきましたか？

平野：ケガをして最初のうちは「あのときあぁしていれば良かった」とか取り戻せないことを考えたり、焦りを感じていましたが、そのうちに「今しかできないことが何かあるかな」って考えるようになりました。競技をしていると、体を動かしたり人と比べたりすることしか見えなくなり、考えることをしなくなるんだと気づき、こういう時こそ考える時間が必要なんだろうと…。復帰後の自分を想像するのはとても有益だったし、そういう地道なものが自分を強くしたんだと感じます。ほかの人が思いつかない考えを出す“引き出し”を、ケガを乗り越えて得ることができたと思いますね。

池江：闘病中は、水泳のことを考える余裕は全くなかったですね。それでも、7月の世界水泳をテレビで見ながら、「自分が出場していたらどうだったろう」と思ったし、違った視点から競技を見るのがすごく面白くて、一ファンとして試合を見ていました。そのうちに、自分がプールに戻ることに何かしら意味があるんじゃないかと思うようになり、「絶対にまた戻ってやる」っていう気持ちになりました。病気になったことで、いろんな人の気持ち…アスリートの気持ちも、自分の気持ちも、病気と闘っている方たちの気持ちもすごく分かるようになり、その経験が自分の人生やメンタルにも大きなプラスになったと感じています。

AYUMU HIRANO

［ひらの・あゆむ］スポーツ科学部4年。新潟県出身。開志国際高校卒。4歳からスケートボード、スノーボードを始め、小学校4年でプロ契約。2014年・ソチ五輪でスノーボード最年少メダリスト（銀メダル）となり、ギネス世界記録にも認定される。大ケガを経て臨んだ’18年・平昌五輪でも再び銀メダルを獲得。東京五輪ではスケートボードでの出場を目指す。

「誰もやっていないことにこだわって研究を続けてきた」

澤野：お二人ともそれぞれの競技で優秀な結果を収めてきましたが、なぜそのような結果を残せるのだと思いますか。

平野：ただ滑って楽しんでいるのではなく、常に失敗と向き合って考える時間を多く取り、誰もやっていないことにこだわってきました。だから、練習から大会で結果を残すところまでの過程では、楽しいという気持ちがほとんどなくて…。自分だけの滑りを求めて継続して研究してきたことが、人よりも高く跳んだり、スピードを落とさず技をつなげられたりということに結びついているのかなと思います。

澤野：人類初の技を決めるには、自分で道を切り拓いていかなければならないですよね。

平野：競技の中では1ミリずれたら失敗してしまうこともあるので、見ているだけでは分からないような1ミリ1ミリの動きにこだわって研究し、練習しています。そういう練習が大きな結果につながる一歩だと考えています。

「人と違うことをしてきたわけではない。練習で自信をつけてきた」

池江：私はシンプルに水泳が好きで泳いでいるし、特に人と違うことをやってきたわけではありません。ただ、練習に対しての気持ちや、1回1回の練習での自分への追い込みという面では、「誰にも負けていない」と思ってやっていました。練習の中でどれだけ自分を追い込み、自信を付けられるか…日本一の練習をやっても日本一になれるわけではなく、日本一の練習をして「練習であそこまで追い込んだのだから」って自分に自信を付けることが一番大事だと思っています。

澤野：では、今の目標や将来像に向かっていくために必要なことは何だと思いますか。

平野：自分がやりたいことや、こうなりたいって思うことが山のようにあります。でも、小さなことから一つ一つただやるっていうのではなく、しっかり自分と向き合って考え、好きなことだけでなく、苦手なことにもどんどん挑戦し、それを継続していく。それによって、自分のメンタルや、見ているものの幅だったり、いろんなところが強くなるんだと思います。そのためには目標を持つことが必要だし、誰かと比較するよりは、何かを創り出していく…僕の場合は、新たにゼロから1を創ることを常に考えていきたいと思っています。

RIKAKO IKEE

［いけえ・りかこ］スポーツ科学部2年。東京都出身。淑徳巣鴨高校卒。16歳で出場したリオ五輪（2016年）で100mバタフライ5位入賞。’18年のアジア大会では史上初の6冠を達成しMVPに輝く。現在、16種目で日本記録を保持。白血病での闘病を経て、20年8月実戦復帰。今年2月のジャパンオープンで50m自由形2位（学生新記録）となり、完全復活へ順調な姿を見せた。

池江：私も、目標を立てることがアスリートとして一番大切なことかなって思います。目標がないと、「何のためにやっているんだろう」となるので。私自身は、アスリートとしても、人としても「池江選手みたいになりたい」とて言ってもらえることが目標ですね。

「“楽しさ”より、むしろ“幸せ”」×「楽しく頑張っていれば結果を出せる」

「自分に負けないことが“勝負”だと考えている」

澤野：競技をしていると必ず勝ち負けがありますが、勝負事で大切なことは何だと思いますか。

平野：競技は勝負の世界ですし、自分の新しい試みに対抗してくる人たちが多い競技なので、勝負したくなくても勝負しなきゃいけない気持ちにさせられることも多くあります。ただ、そこと勝負していたらキリがないと思うし、ずっとプレッシャーや追われる気持ちで何年も続けなきゃいけないというのが、無意味とまでは言いませんが、もっといいやり方があるんじゃないかと…。それならば自分と戦うこと、人との勝負ではなく自分との勝負に重点をおいていった方がいいし、競技も長く続くのかなと思います。そういう戦いは競技だけでなく、人生においてもずっとあると思うので、自分に負けないということ、自分自身の勝負だと位置づけて考えています。

「勝つためにはどうすればいいかを強く考えるようになった」

池江：長く泳げなかった時期から復帰した当初は、練習でもチームメイトたちに全く勝てなくて、悔しさを感じると共に、それでもみんなに勝とうとしている自分に驚きました。16歳頃から日本では誰にも負けないレースばかりだったので、久しぶりに勝てない自分にすごく悔しさを覚えました。勝つためにはどうすればいいのかというのを強く考えるようになり、最近は勝負の世界の中で学ぶことも多いように感じます。

澤野：平野選手は競技に対し淡々と取り組んでいるように見えますが、人類初の技を決めた時など、競技を楽しいと感じますか？

平野：スノーボードもスケートボードも、純粋に楽しいという気持ちは最初からなく、毎日試練のような感覚だったので、今になって急に楽しくなってきたというのは特にありません。楽しむことを意識してやった時期もありましたが、無理やり楽しもうとしている感じになり、「これは違うな」と思いました。“楽しさ”よりもむしろ“幸せ”という意識の方が強くて、苦しいことを乗り越えた先に幸せがあり、そのための今だって思うことの方が多いですね。だから、結果が出た時は「やってよかった」と思いますが“楽しい”ではない。友達とボードのことを考えなくていい時間を過ごす時のほうが楽しいと感じますね。

池江：私は練習が好きで、楽しいっていう感じです。楽しく頑張っていれば結果を出せるという自信と経験があって、その感覚があるので練習も試合も楽しんでやっています。

スポーツの価値

澤野：お二人が考える「スポーツの価値」とは？

平野：練習でできないことや失敗したことに対する向き合い方というか、何千回もやってちょっと成功に近づいたと思えたときに、見つめ直せるのがスポーツだと思うんです。目標を見つめ直すことで、また価値が高まっていくんじゃないかなと感じます。だからスポーツに限らず、自分の好きな趣味やそうじゃないことでも、一度本気になってみることが大事なんじゃないかなと思いますね。

池江：このコロナ禍の中でスポーツをやるべきなのかという声も少なからずあると思います。でも、スポーツを見て勇気をもらっているという人もたくさんいるので、それがスポーツの価値なのかなと思います。私たちは、自分のために競技をやっていますが、自分たちを見て元気になってくれる人たちがいるということを忘れずにいたいですね。

澤野：最後にお互いへメッセージを。

平野：今の池江さんにしか分からないこと、できないことを自分の形で表現していってもらいたいです。僕自身も二刀流という、誰もやっていないことに挑んでいる途中ですが、いろいろ失って得られるものがあるんじゃないかと、見えないものへの可能性を含めてチャレンジしていこうと考えているので、お互い自分に負けないようにやっていきたいですね。

池江：今回の対談で、自分と同じ考えや、全く違うことなど、それぞれが参考になったので、またいろいろお話したいです。スケートボードにも取り組んでいるということなので、是非夏のオリンピックの選手村でお会いしましょう！

澤野：お二人ともありがとうございました。

SS SEMINAR スポーツ科学部ゼミナール紹介

トレーニング学ゼミナール

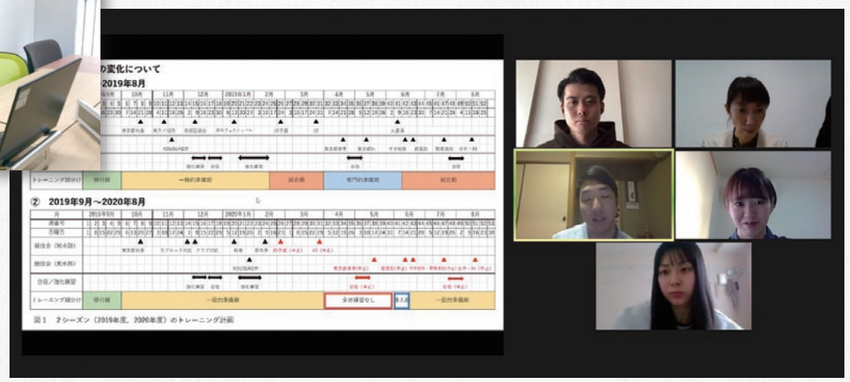
担当教員
青山 亜紀 教授

担当科目
トレーニング学原論

「試合での最高の競技力発揮についての問題」におけるトレーニング論的・試合論的検討

競技スポーツの選手たちは、目標とする試合で最高の競技力を発揮することを目指し一生懸命トレーニングに励んでいることと思います。しかし残念ながら、それを実現するのは難しい状況にあります。「試合での最高の競技力発揮」を達成困難にしている要因の1つには、この問題が非常に個別的で複雑な現象であるという点が挙げられます。したがってこの問題を解決するには、科学知のみならず実際のトレーニング現場から導き出される実践知を用いる必要性があります。青山ゼミナールでは、「試合に向けた競技力の形成」および「試合での競技力発揮」に関わる問題についての先行研究を学ぶことによって、その理論的ベースを深めます。そしてその知識を土台として、実際の現場で生じる個別的な問題点（トレーニング計画や試合への準備等）を挙げ、トレーニング論および試合論的観点から検討します。

コロナ禍においてはオンラインで授業を行ない、データを共有しながらゼミ生と対話して、学びを深めています。



スポーツ科学部授業紹介

コーチング学原論

スポーツ科学部 森丘 保典 教授

コーチの定義やコーチング哲学、倫理観・規範意識、コーチングに関する理論や優れた実践事例を踏まえながら、経験的知見と科学的知見を駆使したコーチング理論の構築および実践の最適化に必要な基礎知識を身につけることを目指します。

競技スポーツ方法実習

スポーツ科学部 西川 大輔 教授

競技スポーツ方法実習では、自身がスポーツを行ってきた経験を踏まえ、「教える」立場として求められる基本的な知識や態度、方法などを身につけていきます。写真のように単純な運動動作（ダブルダッチなど）を取り上げ、実際に「教える」ことを通して実践的に学修できるよう授業を展開しています。

ピックアップ・アスリート PICK UP ATHLETE 2020-2021

LONG JUMP 走幅跳

©日本陸上競技連盟

橋岡 優輝 スポーツ科学部4年

■セイコーゴールデングランプリ 男子走幅跳 優勝

RELAY リレー

©日本陸上競技連盟

鵜池 優至 スポーツ科学部 4年　荘司 晃佑 スポーツ科学部 2年　山本 竜大 日本大学大学院　井上 大地 スポーツ科学部 3年

■日本選手権 男子4×400mリレー 優勝《大会新記録樹立》

WRESTLING レスリング

提供＝日本レスリング協会

石黒 隼士 スポーツ科学部 3年

■全日本選手権 男子フリースタイル86kg級 優勝

SWIMMING 競泳

©ISL

長谷川 涼香 スポーツ科学部 3年

■ISL(国際水泳リーグ) 女子200mバタフライ 5戦全勝
■日本選手権　女子200mバタフライ 優勝
■日本選手権（25m）女子100mバタフライ 優勝

SWIMMING 競泳

本多 灯 スポーツ科学部 1年

■日本選手権 男子200mバタフライ 優勝
■ISL(国際水泳リーグ) 男子200mバタフライ 2位男子400m個人メドレー 2位
■ジャパンオープン（50m）男子200mバタフライ 優勝

SWIMMING 競泳

小堀 倭加 スポーツ科学部2年

■ジャパンオープン（50m）
女子400m,800m,1500m自由形 優勝(三冠達成)
※400m自由形《日本学生新記録樹立》

保護者の皆様へ

MESSAGE from DEAN of SS

現在コロナ禍において、これまでスポーツが持っていた力や魅力は十分に発揮できない状況が続いていると考えられます。本学部が養成を目指している「反省的実践家」は、課題をその現場で発見し、解決へと導く方法論を様々な観点から検討し実践することができる能力を持つ人材を指しますがこの状況を打開するために、このような人材は大いに活躍できると考えています。卒業生は「反省的実践家」として身に付けた能力をいかんなく発揮し、在校生には、ピンチをチャンスに変える発想力と、それを確実に実行していく実践力をさらに磨くことができるよう、本学部の教育についてもより柔軟に時代に適応させ、充実を図っていく所存です。保護者の皆様におかれましては何かと不安が付きまとう状況ではありますが、対策を万全に講じ、学生が安心して学修およびスポーツ活動に取り組めるよう努めてまいります。

スポーツ科学部長　教授 小山 裕三

ミライへトリップ

Go To Future!

日本大学三軒茶屋キャンパスからは、本年度もスポーツ科学部・危機管理学部あわせて約560名の学生が社会へと羽ばたいていきます。希望に満ちた未来への旅立ち、そのお喜びや意気込みを語ってもらいました。

スポーツ科学部 内定者紹介

市民ファーストで、常に考え動ける人に。

私は、スポーツの力を活用し社会に貢献したいと思い、その学びを得るために本学に入学しました。スポーツ科学部では、私がこれまでスポーツを行なってきて感じてきた事以上にスポーツは様々な要素を含み、それが相互に関係し合い成り立っているという事を学び、社会も同様に多くの人々がいるお陰で私たちの生活が成り立っているのだと感じました。就職活動では、入学時思い描いていた視点よりも幅を広げ「スポーツに携わる」という大枠をもって行いました。コロナ禍で採用の延期や中止が相次ぎ不安を感じる日々が続きましたが、「私は将来何がしたいのか」「社会に対して何が行えるのか」など自分を見つめる時間をつくる事ができ、有意義な時間を過ごすことができたと感じています。私は、4月から茅ヶ崎市役所で勤務します。必ずしもスポーツに携わる事ができるか分かりませんが、生まれ育った茅ヶ崎市で、市民の方々を第一に考え茅ヶ崎市を発展させる一助となれるよう努めていきたいと思います。

茅ヶ崎市役所に内定！

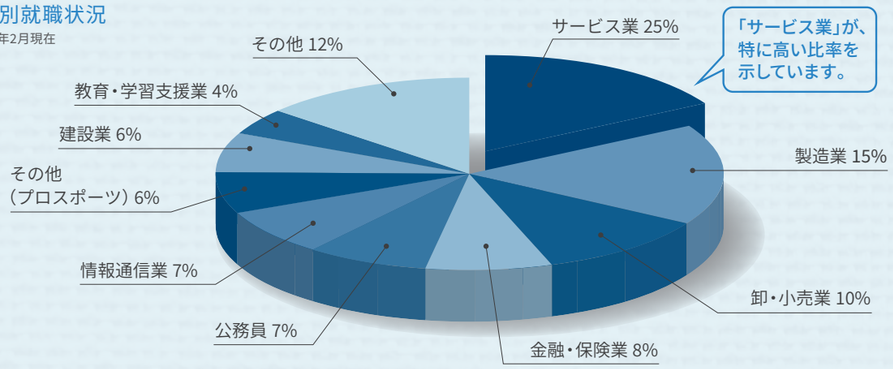
スポーツ科学部 4年 八幡 悠平

スポーツ科学部生の約75%が一般企業への就職！

スポーツ科学部第2期生の就職実績をご紹介します。

業種別就職状況

※2021年2月現在



主な就職先

【建設業】田中建設工業株式会社【製造業】本田技研工業株式会社、東レ株式会社、東芝テック株式会社、キリンホールディングス株式会社、日清製粉株式会社、日本ハム株式会社【情報通信業】NECフィールディング株式会社【運輸業】東日本旅客鉄道株式会社、ヤマト運輸株式会社【卸・小売業】ゼビオ株式会社、株式会社ノジマ、伊藤忠食品株式会社、株式会社カインズ【金融・保険業】株式会社みずほフィナンシャルグループ、株式会社三井住友銀行、株式会社りそなホールディングス、東海東京フィナンシャルホールディングス株式会社、株式会社千葉銀行、川崎信用金庫、住友生命保険相互会社【医療・福祉】株式会社ベネッセスタイルケア【教育・学習支援】学校法人日本大学、学校法人拓殖大学【サービス業】株式会社ルネサンス、株式会社ボディーワークホールディングス、財団法人日本相撲協会、株式会社エン・ジャパン、マンパワーグループ株式会社、株式会社博報堂、東武トップツアーズ株式会社、株式会社フュービック、エイベックス株式会社、株式会社中村塗装店【公務】東京出入国在留管理局、陸上自衛隊、和歌山県庁、茅ヶ崎市役所、警視庁、埼玉県警察、茨城県警察、東京消防庁 その他、プロスポーツ選手として競技継続

危機管理学部

警察官内定者×金山 泰介 教授

プロフィール
東京大学法学部卒、警察庁入庁後、在タイ大使館1等書記官、警視庁公安部参事官、山梨、栃木、埼玉県警察本部長等を歴任。その間、一橋大学公共政策大学院客員教授、東京大学公共政策大学院非常勤講師、京都大学公共政策大学院非常勤講師として社会安全政策論を講じる。

── まずは皆さん、なぜ警察官を志望したのかを教えてください。

出沼：私は小さい頃から体格の良さが取り柄でしたので、それを最大限活かせる職業に就きたいと思い志望しました。

金井：私の出身の群馬県は車社会なので、交通機動隊員として故郷の交通秩序を守っていきたいと思ったのが理由です。

横山：私は、近年の特殊詐欺のニュースなどを見て、被害で苦しむ人たちの役に立ちたいと思い志望しました。

浅田：私は中学生の頃から警察官に憧れていたのですが、警視庁の見学や警察署のボランティア活動などを通して、地域住民に寄り添ったり実際に不安や怖い思いをしている人を助けている警察官の姿を見て、自分もそうした人々の味方になりたいと思ったからです。

── 危機管理学部での学びや就職支援は、警察の採用試験において役立ちましたか？

浅田：授業の中で警察官の仕事内容や警察官に求められていることを学んでいたので、面接の際に自分が思い描く警察官像を具体的に伝えることができました。また、コロナ禍においても面接指導を綿密に行っていただいたので、自信を持って面接に挑むことができました。

横山：実際に警察での実務経験がある先生が多くいらしたので、授業の中で仕事のリアルな話を聞けたことは役に立ったと思います。

出沼：犯罪への対応だけではなく、災害時などにどう動くべきかということも学べて、知識や覚悟を得られたのはとても良かったと感じました。体力試験に向け、スポーツ科学部の先生方からアドバイスをいただいたのもうれしかったですね。

金井：外部の公務員試験スクールと連携した講座を受講することで、公務員になるための様々な過程と必要な知識を学ぶことができた点が良かったです。

── 本学部にあって他学部や他大学に無いものは何だと思いますか？また逆に、本学部にもあると良いと思ったものは？

出沼：警察官はもちろん、検察官など現場を経験してきたOBの先生が多く、実務体験を踏まえての授業をたくさん受けられるというのは貴重な学部だと思います。

横山：警察だけでなく、入国管理局やテロ対策など様々な領域で活躍された先生方のお話を聞く機会があることが本学ならではで、公務員の仕事について視野を広めることができるのが良いところですね。

浅田：自分が興味のある研究に関する本が図書館に揃っていたので、すごく勉強がしやすかったです。ただ、試験対策の情報共有などを含め、他のゼミナールの学生ともっと交流する機会が欲しかったですね。

金井：卒業生がまだ一期しかいないので、OB・OGから就職関係の話を聞く機会が少なく、近い世代との交流といった情報源が少なかったように感じました。

── その点は今後、皆さんに後輩の情報源になってもらいたいですね。では最後に、本学での学びを社会でどう活かしていきたいか、抱負をお願いします。

出沼：子どもやお年寄り、女性の方に親しまれる存在として、その期待を裏切らないよう、体格の良さを活かした安心感を与えながら誠実な対応ができる警察官になりたいと思っています。

金井：本学部で学んだことを総動員して、物事を様々な視点から見られるようになりたいと思います。そして、誰もが取り残されない社会の実現を、警察官として手助けしていきたいですね。

横山：サークルやアルバイトなど、学業以外で培ってきた人間力を活かし、誰からも頼られる存在になりたいと思います。

浅田：地域社会の中では子どもや女性、高齢者、社会的弱者を狙った犯罪などで困っている人がいます。女性の警察官だからこそ相談しやすいこともあると思うので、そうした人たちの力になれるよう、信頼される警察官になりたいと思います。

── 皆さんの活躍を期待しています。

教員の眼

防災・危機管理を学んで
考える力をつけよう。
社会に出たら現場目線で
学び考え続けよう。

危機管理学部 教授 木下（きのした） 誠也（せいや）

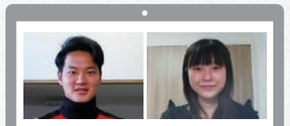
篁　：長年の実務経験を経て、学生に何を期待し、どういうことを教えたいと思っていますか？

木下：地に足をつけて考える人になってほしい。大学生の間にもちろんたくさん学んでほしい。でも学ぶことはあまりに多く学び終えるということはありません。一生涯学び続けて成長し続けることが重要です。若いうちにとことん学んで考える力をつけること、そして社会に出たら、現場に立脚して学び考え続けなければならないことを知ってもらいたいと思います。

麻生：激化する災害にどう対応する必要がありますか？

木下：ハード・ソフト両面が必要です。ハード面は国家百年の計として進めなければいけません。ダムや一連の堤防をつくるのに数十年かかります。令和2年に完成した八ッ場（やんば）ダムは70年近くかかりました。時の政治・経済の情勢によって是非を論じるのではなく、国民が長い目で支持することが必要です。
ソフト面では、行政による情報提供や誘導が必要ですが、究極は「自分の命は自分で守る」ことです。想定外のことが起こるという想像力を持って、災害が起きた時にどう行動するか（マイタイムラインなど）を考えることが重要です。

インタビュアー（リモートで実施）



危機管理学部3年 篁 樹生　危機管理学部3年 麻生 桃夏

〈教授プロフィール〉
昭和53年東大院卒。建設省（現・国土交通省）入省。平成21年近畿地方整備局長を退官。愛媛大学防災情報研究センター、日本大学生産工学部を経て、平成28年より現職。博士（工学）。

“危機管理”を見て聞いて知って！

1年生対象「危機管理学部ワールドカフェ@Zoom」開催（2021年1月22日）

学部の1年生同士がクラスの枠をこえてオンラインで交流する「危機管理学部ワールドカフェ」を1月に開催しました。「自主創造の基礎2」の予備日を利用して自由参加としたものですが、当日は約200名が参加。学生3～4名の少人数グループでのトークを通じてお互いのクラスの様子を情報交換したり、オンライン授業での交友関係の広げかたについて意見を出し合いました。参加学生からは「初対面でも授業など話が合うので盛り上がりやすかった」「グループをきっかけにSNSでつながることができた」「もっと時間が欲しかった！」といった熱心な声が多数寄せられました。

WEBオープンキャンパス・進学相談会（2020年6～8月）

今年度のオープンキャンパスや進学相談会も、コロナ禍の中で初のフルオンライン開催となりました。キャンパスにこれなくても学部の学びを知ってもらうために、「危機管理学って…。ここで何が学べるの？」、「キャンパス 見て！聞いて！発信して！」といった学部紹介から体験授業・オープンゼミまで多数のオンデマンド動画コンテンツを配信しました。進学相談会も6月から8月にかけて6回オンラインで開催し、高校2～3年生を中心に計114組が参加。カリキュラムや入試、施設、進路など相談者の疑問に専任教員が丁寧に回答しました。

危機管理学部オープンキャンパス2020体験授業・オープンゼミ

セキュリティインシデント事例学習	美濃輪正行教授
イスラエル事情	茂田忠良教授
日本は新型コロナウイルスの危機管理に成功したのか	福田充教授
身につけよう！リスクをマネジメントする力の基礎	山下博之専任講師
グローバル時代の功罪	先﨑彰容教授
急転！ミサイル防衛の行方	勝股秀通教授
オープンゼミ　東京オリンピック・パラリンピックのテロ対策	小谷賢教授ゼミ

ゼミ長オンライントーク
コロナ禍の1年を振り返って

コロナ禍における社会状況の変化に伴い、これまでにない学生生活を送ることになったこの1年。通常の授業はもちろん、ゼミナールもオンラインという形で実施されるようになりました。この「新しい学び方」をどう感じていたのか、5人のゼミ長たちに振り返ってもらいました。

中澤：まず、皆さんが選択された領域の中で興味深かった授業について教えてください。

宮崎：私は災害マネジメント領域ですが、中でも興味深かったのは「損害保険法」です。保険はこれからの自分の生活にも役立てられるという点で面白いと感じました。

オンライン授業は時間を効率的に使える。

鳥井：私は情報セキュリティ領域の専攻ですが、それとは関係なく感染症対策の授業が興味深かったですね。選択した時はこうした事態になると思ってもいませんでしたが、今どういう点が問題になっているのかなどを理解することができ、面白かったです。

鈴木：大学に入りテロに関するテーマに興味を持つようになったので、グローバルセキュリティ領域を選択しました。日常の中でも興味・関心を得られる機会が増えたことで、自分の人生を明るくしてくれたと感じています。

中井：私は災害マネジメント領域を学ぶ中で「災害対策論」に興味を持ちました。その考え方や視点を得て、災害対策の基礎的な知識から学ぶことができ、とても有益でした。

野田：パブリックセキュリティ領域を専攻しましたが、「刑事司法手続」に興味を惹かれました。刑事ドラマやニュースを見て感じていた疑問など、身近な所と関連して法律を学ぶことができました。

中澤：コロナ禍でオンライン授業となりましたが、メリット・デメリットはどう感じましたか。

宮崎：オンライン授業はいつでも受けられるし、わかっているところは倍速で見られるので時間短縮できる点が良かったと思います。

中井：動画の再生速度を変えられるので、気になった部分を何回も聞き直しできますしね。

鳥井：時間という点では、私の場合、往復2時間ほどの通学時間を他のことに効率良く使えたのも良かったと感じています。

鈴木：遠方から通う学生にとっては感染リスクを減らせるというのがメリットですが、誰にも会わない状態が続いて苦痛に感じました。キャンパスで友人との会話やゼミ生との交流もできず、とても残念でした。

対話の機会がなくなったのが残念。

野田：以前は授業後に友人と意見交換をして考えを深めたり、先生に質問したりできましたが、そういう場が無くなったことがデメリットだと感じます。

鳥井：私も、教授室で先生にお話を伺うことができなくなり、1対1で学びを得る機会を失ったのが一番の損失だと思います。

宮崎：画面の中の景色がずっと変わらないし、自宅だと集中できなくて…。いつでも受けられるので、つい「あとでやればいいや」と先延ばしにしてしまった結果、課題の提出が期限ギリギリになってしまったりしましたね。

中井：全て画面上で行っていたので、とても寂しいなと感じました。特にゼミナール活動においてその寂しさを感じて、対面で行うことの大切さに気付かされました。

中澤：2021年の新入生に対してメッセージをお願いします。

野田：大学の授業は〝与えられる〟のではなく自分から〝取りに行く〟ものなので、オンライン授業内でも能動的に動いてほしいですね。

鈴木：キャンパスライフを楽しくするのは自分自身です。どのような形式でも授業はしっかり受けて、その中で興味を見つけ、自分の生活を充実させるための材料として活用してほしいと思います。

中澤：皆さん、有難うございました。

特集

コロナ禍での危機管理学部の学び

2020年、突如訪れたパンデミックという事態。社会に大きな苦難を強いることになった新型コロナウイルス感染症は、教育の現場にも大きな変革を迫るものとなりました。危機管理学部でも学生が皆、安心・安全に授業を継続して受けることができるよう、様々な感染症対策を講じながら「新しいスタイルの学び」を実践しています。

1階テラスで屋外ゼミも実施

ソーシャルディスタンス × 少人数での対面授業

新型コロナウイルス感染拡大状況を踏まえ、ソーシャル・ディスタンスを保った教室等において履修人数が少ないゼミなどの一部の限られた授業のみを中心に、感染予防策を十分に講じた上で対面授業を実施しました。また、対面授業が困難な学生は、オンラインで受講し、対面とオンラインを併用するハイフレックス（HyFlex：Hybrid-Flexible）型授業を実施することで、学生と教員、学生同士とのコミュニケーションを通じて、学修効果を重視した学びを深めることができました。今後も3密（密集、密接、密閉）を回避し、一人ひとりが感染予防措置をとるなど新型コロナウイルス感染拡大防止対策を徹底しながら、オンラインと対面授業のそれぞれの強みを活かしながら、安全と学修機会確保の両立に向けた効果的な学びができるよう準備していきたいと思います。

上：少人数のゼミでは、十分なソーシャル・ディスタンスを保った対面授業を実施。　右：発表時の様子。徹底した予防策を学生一人ひとりが心掛けながら、コロナ禍前と遜色ない学修効果を実現。

「日本大学健康観察システム」での体調管理

学生一人ひとりが自分の体調に注意を向け、健康状態の観察・記録を習慣化できるように、「日本大学健康観察システム」を用いた体調管理を行っています。学生はパソコンやスマホからアクセスして体温や体調を1日2回記録することで、自身の体調変化の有無を視覚的に把握することができます。キャンパスや図書館の入構時には当日の検温・消毒に加えてこの記録も照会することで、キャンパス内の感染拡大防止に役立てられています。

学生証をかざすことで、入構時の学生の健康状態を記録。キャンパスの随所に設置することで学生一人ひとりの情報を綿密に把握します。

在宅でも学べるオンライン授業の導入

オンライン会議ツールを用いてインタラクティブな演習や語学、グループワーク等を行う「ライブ型」と、あらかじめ録画された講義動画を視聴して課題に取り組む「オンデマンド型」を組み合わせることで、危機管理の学びの基礎から発展的な演習まで在宅でも学べるオンライン授業体制を急ピッチで整備しました。学生・教職員ともに手探りでのスタートでしたが、受講者からは「聞き逃しても繰り返し視聴できるのでノートを取りやすい」「自分のペースで学べる」といったポジティブな気づきも寄せられました。一方で、学生側の環境整備が必要だったり、個別の相談がしにくい部分もあります。そこで、キャンパスとして学修環境補助費の支給や受講端末の無償貸与、図書館休館中の資料無料郵送貸出しなどの物質面での支援を行うとともに、たとえば1年生の少人数制演習科目「自主創造の基礎1・2」では担任とのオンライン個人面談を学期中に複数回実施するなど、例年以上にクラス担任や指導教員が個々の学生の状況把握や心理面でのサポートにつとめました。

双方向リアルタイムでの受講が可能なのはもちろん、オンデマンド形式でいつでも受講・復習が可能に。

MESSAGE from DEAN of RM

卒業生の皆様へ

エントランスの桜が皆さんを出迎えた2017年4月の開講式から4年が経過し、第2期生の皆さんを社会へ送り出す時を迎えました。皆さんの卒業を心からお祝い申し上げますとともに、ご父母の皆様にもお祝いの言葉を送らせていただきます。

新型コロナウイルスの感染拡大により世界中が揺れ動き、大学も対面授業が実施できなくなるなど、大きな影響を受けました。そのような中でも卒業論文や卒業研究を無事に完成させ、進路も決定された卒業生の皆さんの努力に心から敬意を表します。危機管理学部での学びを基礎にさらに大きく成長されることを祈念します。

危機管理学部長　教授　福田　弥夫